



2011年5月19日放送

印象に残る症例①

たかはし内科 副院長 高橋 浩子

私は徳島で内科を開業しています。赤ん坊からご老人まで、幅広い年代の患者さんを診ています。治療には西洋薬も使いますが、薬の数ばかり増え、症状がなかなかよくなりません。そういうとき、漢方薬が効いて、西洋薬を減らせると、患者さんにとっても喜ばれます。

今日は、女神散が著効した症例をご紹介します。

症例は、56歳の女性。初診は平成16年5月で、初診時は寝間着でこられました。54歳で閉経した頃から体調はよくなかった。55歳時、ご家族の事故をきっかけに、立ちくらみ、頭痛、のぼせを感じるようになった。「とにかく何をしても疲れやすくなります。動悸がして、肩こりもひどいし、頭も痛いのです。ちょっとしたことで不安になり、イライラします。大好きだったサスペンスドラマも怖くて見れなくなりました。ふらふらして、気力がわきません。冷え症ではなかったけど、このごろは足が冷えてつらいです」とおっしゃいます。循環器科では高血圧だといわれ、ロサルタン 50mg とプロプラノロール、ニコランジル、不安感に対しエチゾラムを投与されました。これらを内服して1年たっても症状がよくなりませんので、私の外来においでました。

身長150センチ、体重55キロ、がっちりとした体格ですが、1年で4キロやせた。顔色は

悪く、シミが多い。目はうつろで、声に力なし。脈は細く、舌下静脈の怒張軽度、腹力は3/5。血圧120/58。顔はのぼせているが、両足は冷たい。女神散7.5gを2週間分処方しました。ロサルタンは半量、エチゾラムは自己調節、あとの2剤は中止しました。

さて、2週間後。診察室に入ってこられた患者さんは別人のようでした。お化粧品をして、きちんと服を着ていました。「せんせ、ようになったわ〜！ほんまにようになった！」と笑っていました。感動しました。漢方薬って、こんなに聞くんだと驚きました。

第2診以降、ロサルタン、エチゾラムも中止。結局、西洋薬4剤を中止し、女神散単独で、1年間困っていた症状が数日で消失しました。この方は63歳の現在は、高脂血症の治療で元気に通院されています。「もし、また悪くなっても、先生がおるから大丈夫、安心よ」と言ってくださいます。医者冥利につきる言葉です。

女神散は、補血あるいは補気血作用を有する理気剤で、浅田宗伯の『勿誤薬室方函』に「血証、上衝、眩暈を治す。およそ産前産後通治の剤なり」とあり、『勿誤薬室方函口訣』には「この方は元、安栄湯と名付けて軍中七気を治する方なり。婦人血証に用いて特験あるをもって今の名とす」と書かれています。もともとは戦で刀傷を負ってパニックになった武士に飲ませたということです。それを浅田家では、女性の血の道に格別効いたので、のぼせ、めまい、頭痛、肩こりなどの症状の出やすい更年期や産前産後の女性によく用いるようになりました。

女神散はおもに補血薬・温陽薬・理気薬・清熱薬から構成される方剤です。当帰・川芎は血を巡らし、血を補い、桂皮・丁香は脾胃を温めるとともに、気をおろす効果があります。木香・香附子・檳榔子でよく気を巡らし、うつを散じます。蒼朮・人参・甘草で脾胃を補い、黄連・黄芩で上焦の熱を取ります。黄連・黄芩以外はぬくめる薬です。女神散は構成生薬の多い方剤で、これら補血・理気・温陽・清熱の組み合わせで、気血の巡りをよくし、抗うつ的な効果とともに、身体上下の温度を調整する作用があります。女神散は寒熱を理気作用で調和しながら気滞を改善する、他にあまり例をみないユニークな処方といえます。

女神散の保険適応は「のぼせ、めまいのあるものの、産前産後の神経症、月経不順、血の道症」とあります。生薬の構成から、更年期や産前産後などの血の消耗した、あるいは瘀血状態になった所に、何らかのストレスで肝気の疏泄が悪くなり、衝逆が起こり、上熱下寒の状態になったものに適応があるといえます。

女神散と同様な主治をもつものに加味逍遙散があります。加味逍遙散は疎肝作用を持つ代表的な柴胡剤で、体質の虚弱な人の冷えのぼせ、更年期障害、月経不順などによく使われます。加味逍遙散には清熱効果のある柴胡・牡丹皮・山梔子が、補血には当帰・芍薬が入っています。主治が女神散と似ていますが、構成生薬にあまり共通するものはありません。気の巡りをよくする理気薬や温陽薬は女神散のほうに多く含まれています。女神散の適応

となるのは、下焦が極端に冷えて虚した状態に、ストレスで肝気の疏泄が悪くなり、気逆とともに血熱も同時に起こったような場合です。同じ上熱下寒といっても、加味逍遙散より上下の解離が極端で、足の冷えや、のぼせが強いものに適応があると考えます。

私は、女神散を、受験などの強い緊張で「頭がのぼせ、足が冷えて、パニックになった」学生にもよく使います。エキス剤をお湯に溶かして、水筒に入れて教室に持って行き、適宜飲むように言います。

更年期や産前産後で、パニック障害や過呼吸を起こしている患者さんには、処置室でお湯に溶かし、飲ませます。15分ほどで落ち着いてきます。処置室で飲ませるときには2袋、5g 使うこともあり、エキス剤を早く効かせるには、量も重要だと感じます。即効性があり、なおかつ眠くならないので、テストの当日や、車の運転の患者さんにも安心して使えます。こういう点が、西洋薬の抗不安薬より使いやすいところです。

女神散が劇的に効いた今回のケースは、更年期で血虚になっているところへ、家族の事故というストレスが原因で、肝気の疏泄が失調し、気滞が生じるとともに衝逆が起こり、のぼせ、ほてり、頭痛などが生じたと考えられます。衝逆した気血は体の下方に巡らないので下半身は冷え、上熱下寒の状態になり、頭はのぼせて熱を持っているのに、足は極端に冷えていました。この症例では、女神散の理気活血作用、気血双補作用、清熱作用がびたつとはまって、著効を示したのでしょう。

患者さんの困っているいろいろな症状をよくしようと、西洋薬を投与すると、薬の数ばかり増え、症状はあまりよくなることは日頃よく経験します。今回の症例では、女神散を投与することで諸症状が改善し、西洋薬4剤全てを中止することができました。女性の血に道の治療は、漢方薬の得意分野です。必要最小限な投薬で患者さんがよくなると、主治医として、実に嬉しいものです。

エキス剤を効かせるコツは、方剤の適応を明確にし、使用する症例を方剤の適応に絞って使用することです。漢方薬を処方したとき、適応を深く考えずに使っても、効いたときは、なぜ効いたのか、残念ながら効かなかったときには、なぜ効かなかったのか、次の一手に使える方剤は何かを、方剤の構成生薬や患者さんの症状、所見を元に考えていくと、使える漢方薬が広がってきます。赤ん坊から老人まで、幅広い患者さんを診ていかなければならない、私たちプライマリケア医が、漢方薬をしっかりと使えるようになると、患者さんもよくなるし、患者さんがよくなると自分も元気になる。ありがとう漢方薬！私はそんな気持ちで漢方薬を勉強し、投与しています。